

『砂漠の国の柔道場』 『第一話』 サウディアラビアでの道場設立

岡本文夫 （元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）



ある日の模範演武。見守る弟子たちの列右端は、唯一の日本人弟子。当時6歳の長男英一郎

筆者は、サウディアラビア王国カフジの原油生産基地の原油出荷部門(Shipping)担当として二度駐在（通算8年間）したが、その期間の内約7年間、現地人の青年から子供までの249名に柔道指導を行った。

1万キロ彼方の酷暑の地での勤務には多種多大な苦勞に起因するストレスを伴う。夏場は50度Cを超える砂漠気候に加え、イスラームを社会規範とする生活環境、言語や社会常識の相違等々、比較文化論で珍しがったり笑ったりでは済まされない現実があった。そうした現地での仕事と生活の困難さを乗り越えるために、筆者が考えついていたのは、高校・大学・社会人と継続した修行の結果『人生のバックボーン』となっていた柔道を通じて、現地と交流することであった。

しかしながら、柔道活動を定着させるまでが、ひと苦勞だった。

先ず、道場を設立する場所の選定がある。俊敏そうなサウジ人部下2名に柔道を教えてやるから道場候補地を探してこいと指示したところ、基地開設初期の食堂跡の廃屋、開かずの倉庫を探し出してきた。なるほど、道場を開くには十分な底面積があった。問題は、厨房設備を据え付ける上での必要からだろうか、コンクリート床の上には二つのブロック状の突起があり、これを除去しなければ畳を敷けない。

そこで、基地施設部の日本人部長に作業を依頼したのだが、長期現地勤務に疲れ果

てて不作為に徹している男だから、「自分でやったらあ」などと全く協力なし。

そこで、職制など全く無視して、筆者の社宅で時々女房手作りの日本料理を振る舞っていた建設関係の日本人コントラクター諸兄に協力を依頼。快諾した彼らは、削岩ドリルでコンクリート突起を破碎して、鉄筋は掘削穴に折込んでその上をセメンティング。かくして、40 畳は設置可能な平面を確保出来た。

これに並行して、アラブ人側の賛同を取りつけなければならなかった。

鋤業所には福利厚生課があるので、サウディ国内にあらう筈もない柔道畳を買い付けてもらうべく日参した。前例のない話だとして、最初は全く協力の素振りも見せなかった課長のカハラン氏だったが、熱意に根負けしたのと、「アンタ自身や部下や、その子供達にも柔道を教えてやる」との交換条件が有効に働いて、ついにイギリスから柔道畳を輸入してくれた。最初は 20 畳だったが、急速に道場が活況を呈したので、半年後に 20 畳を追加輸入して貰えた。ただし、イギリス製畳は微妙にクッションが入っていて、筆者を戸惑わせた。ここに、柔道本家の日本と柔道文化移入国との哲学の違いがある。投げられる者の保護のために優しいクッションだ。しかし、技を撃つ際には、瞬間のターンを要するのだが、微妙に足裏が沈み込む分だけ摩擦が生じて足首や膝に負担が生じて、それが捻挫の原因になる。やはり、急激なターンのためには、畳は固くなければいけないし、畳が固くとも受け身の基本を身に着けることで事故を防ぐべきだというのが筆者の自論である。

とはいえ、会社の廃屋活用ではあるが、自分の道場を持てたことは誇らしかった。道場正面に神棚を設置することは、国教イスラームが絶対的タブーとするので、尊敬してやまない大学柔道部の堀部正一師範の書を二枚掲示させて頂いた。

道場開きの初稽古は、道場開設のために手足となって働いてくれた二人の部下、レダとセイフ。そして、二人が 1,800 人の従業員の中から探し出した唯一の柔道経験者である生産部のハッサン。この 4 人で汗を流したのだが、初心者二人には優しく受け身の基本から指導したのは勿論だ。クウェイトで柔道を習って 1 級（茶帯）を取得していたハッサンに対しては、手心を加えずに心行くまで左右に投げ飛ばした。

（詳細は、シリーズ後段で紹介する予定であるが、柔道を通じて培った信頼関係には誠に深いものがあって、筆者が年に一回の長期休暇で現地を離れる時のクウェイト空港かダハラン空港への車の送迎役を、レダはその役目を絶対他のスタッフに譲らなかった。更に、レダは針ネズミやトカゲ（ザップ）の赤ちゃんや砂漠の珍味・白トリュフ（ファッガ）をセッセとプレゼントして好意を現わすのに一生懸命だった。

また、後年の湾岸戦争勃発時、死ぬかもしれない切迫した状況下、セイフは筆者を置いて逃げることは出来ず、イラク軍の猛砲撃と一緒に耐えてくれた。）

指導するからには、チョイ覗きは御免で、長期的についてきて欲しいものだ。

そこで、筆者は、入門受付に当たって二つの踏み絵を置いたつもりだった。

ひとつは、田舎町のカフジには柔道着など売っていない。180 キロ北のクウェイトか、300 キロ南のダンマンまで行って、自分で柔道着を買ってくることに。

もうひとつは、インテリジェンス的観点から周到に準備した入門書に記載・署名をすることだった。一見履歴書にも似た入門書式には、筆者が把握したい個人情報欄を沢山盛り込んであった。そして、最後の行には、「怪我をしても自己責任とする。師範を訴えることなかれ」という一文を入れ、サインを取るようしていた。

筆者自身は、高校時代に試合で腕を骨折。夏合宿で脚にひびを入れた体験がある。しかし、自己の未熟さを恥じこそすれ、相手を恨んだことは一度もない。これが日本人の考え方だ。しかし、アラブ人に同じ考えは通用しない。一筆取っておいても、トラブルになれば効果の程は期待できないのだが、一応の保険にはなるかもしれない。

入門書式を書かせて、アラブの民族性を垣間見た気がする。大人の入門者の半数くらいは生年月日を書けない。アジアモンスーン地帯の民、日本民族は千年以上前からの農本主義だったから、収税台帳としての戸籍制度が確立していた。従って、その伝統からして自分の生年月日を言えない日本人は、まずいない。しかし、遊牧の民であったアラブ人は、「アイツは俺より年上だし、コイツは年下だ」という相対関係だけで社会を渡ってくれば十分だったのだろう。筆者が執拗に質問すれば、「それがどうしたの。Why?」。筆者が知りたかったのは、生年月日ではなく、弟子が鉱業所のどの部のスタッフなのか、社外なら、どんな仕事に就いているのかだった。一般事業者なのか、警察なのか、軍隊なのか等々。所謂、『おっかない筋』に弟子を持ったならば、彼の地での仕事と生活上の安全保障に繋がってくる。

少年、子供の入門については、父親の **Occupation** を必須とした。

石油立国のサウディのことであるから、田舎町のカフジにも全省庁の出先機関があり、局長が在籍している。入門書式の父親の職業欄で各省庁の高官であることを確認する度に、正直のところ『シメタ!』と思ったものだ。子弟を預けようとすることは、取りも直さず、筆者の現地での信用度を示している筈だった。

入門の踏み絵のひとつである柔道着の入手については、半年程で無意味になってしまった。弟子が 40 人くらいになった頃、カフジの街にある埃だらけの倉庫のようなスポーツショップが、ついに韓国製の安手の柔道着を置くようになってしまったからだ。しかし、こんな世界の田舎に柔道着の需要を創造したかと思えば、何となく満足を感じたものだ。

順調に発展していった柔道活動であったが、スタート当初のひとやまを超える必要があったエピソードをふたつばかり紹介しておこう。

一般的に言って、平均的アラブ人の体格は平均的日本人より勝っている。医療水準の歴史からして適者生存の原理が働いた結果ではないかと推察している。

入門などという謙虚な話ではなく、筆者に挑んできた現地人は何人かいたのだが、我が **Shipping** のシニア（上級）スタッフであるハムードもそのひとりだった。米国留学中に空手を経験しており、柔道も齧ったという彼は、小生より一回り立派な均整のとれた体格をしていた。留学帰りのプライドとともに、一種の資源ナショナリズムからなのか、外国人である筆者から業務上の指示を受けるのは気に入らないと見えて、

「I'm thinking something now (今ちょっと考え事してるもんで)」などと、筆者の指示には従わないこともあった。

道場には、事務所スタッフや友人達 10 名ばかりギャラリーを連れて現れたハムードは、空手着ではあったが様になった着こなした。アラビア語の野次だか応援はサッパリ理解できなかったが、「この生意気なヤパニをやっつけるから、見とけよ!」、「ヤレッ! やっつけろ!」という言葉らしいのは語感から推察出来た。

堂々とした体格と挙措動作からして、『コイツ、本当に強いんじゃないのか?』と、少々心配だったが、弱味など見せたら今後の柔道指導の権威が失墜してしまうではないか。

「おい、ウォーミングアップだ。フォローしろ。『指』立て伏せ、20 回」。「エッ?!」。両手の 5 本指を広げて体前支えしてしたもの、両腕をブルブル振るわせて屈伸など一度も出来はしない。『ナーンだ。言うほど大したことはないじゃないか』。

後は立っても寝ても筆者のやりたい放題。連れてきたギャラリーの手前、突っ伏して動けなくなったハムードのプライドを守ってやらねばならなかった。

「おい、どうしたハムード。俺は知ってるんだよ。お前はホントはもっと強いんだ。今日は何か調子が悪かったんじゃないのか?」「ええ、今日は煙草を吸い過ぎました」「そうだろう、そのせいに違いない!」。

これで、ギャラリーに対する最低限のプライドは守れたに違いない。

「ところで、今日の稽古の印象はどうだった?」「Splendid ...」

翌朝から、仕事の指示に対する反応は劇的に改善された。ルーチンワークだったら、名前を呼ぶだけで、サッと立ち上がって、「Yes sir! Mr. Okamoto」。

俄然、仕事がやり易くなった。その後、彼が道場に顔出しすることは皆無だったが、連れてきたギャラリーの約半分が入門希望したので、受け入れた。

Shipping の部下は 30 名いたのだが、その内 6 名はパレスチナ人だった。大型タンカーが来航すれば丸 2 昼夜連続の船積みになり、それでもなくても 3 シフトワークが当たり前の職場だから、実質的な働き手はハングリー精神旺盛なパレスチナ人だった。

一方、サウディ政府からは自国民への業務移譲を義務化されており、パレスチナ人の解雇をやかましく命令してきたが、筆者は頑として彼らを守っていた。

当然のこととして、パレスチナ人は筆者に誠意を尽くしてくれていた。

ある夜、パレスチナ人のカリエールが、筆者が一人で残業しているのを確かめた上で、ご注進に及んでくれた。

曰く「ミスター・岡本、〇〇〇〇にはご注意ください。アイツは CID (中央情報局) のエージェントですからね」「エエッ! 本当か?」

パレスチナ人には言語の障壁はないし、いつ解雇されるかもしれない外国人の弱い立場にいるから、セキュリティーマインドが弱い日本人より余程情報能力に優れている。

日本人が管理職を務める重要ラインには、必ずひとり CID のエージェントが配属さ

れており、素知らぬふりをしながら日々の行動や反政府・反イスラム的言動がないか否かを監視しているとのことだ。

筆者は、思い当たった。名指しされた男はジュニア（下級職）スタッフで、残業するような任務でもなくせに、筆者が残業しているとしばしばデスクに残っていた。

おしなべて、朝は遅刻が多くで就業中に消えることも度々、定時にならなくても早めに帰宅するアラブ人スタッフが多い中、筆者は、彼の残業もどきを好意的にとらえていた。『たまには、こういう感心なスタッフもいるんだなあ』。

筆者は甘かった。彼は筆者の監視役を務めていただけなのだ。

しかし、それくらいを不愉快に思う筆者ではなかった。それならば取り込んで、筆者にとって好都合な情報をドンドン流させてやろうではないか。

「お前、いい体してるなあ。柔道教えてやるからやってみろ、お前なら強くなれるぞ」。

彼が弟子入りしさえすれば、筆者の実力を肌で感じさせることが出来たのだが、残念ながら実戦まで付き合わせられなかった。しかし、道場に連れ出して稽古の見学をさせた、間違いなく秘密警察には筆者に関する詳細な観察結果を報告したことであろう。

『岡本って日本人は、リーダーシップ溢れる真面目な仕事をする。しかも、無茶苦茶柔道が強いし、しかも優しい』。(笑)



道場の中では、全て日本語。「SEIRETSU！（整列）」「SEIZA！（正座）」「SENSEI NI REI！（先生に礼）」



おかもと・ふみお

1947 年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田古隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013 年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」(財界研究所刊)を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段 (クウェート国柔道連盟七段)。

To be continued